
元の日本へ・・・

バッシャー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

元の日本へ・・・

【Nコード】

N1143E

【作者名】

バッシャー

【あらすじ】

間違った道に進んでしまった日本それを変えるために少年は立ち上がる

プロローグ（前書き）

唐突に思いついて書いたので更新がめちゃくちゃになるかもしれません。タイトルも変更するかも知れません

プロローグ

西暦2000年

日本は人型機動兵器「セルク」の開発に成功。

それ以来、自衛隊は日本軍と改名し、異常な程の速さで数々の国々を支配していった。

日本国内は権力がものを言う荒れた世界に変わってしまった。

現在、日本に抵抗している勢力は二つ「EU」と「アメリカ合衆国」改め「アメリカ連邦国」

そして続く戦い、そして八年が過ぎ一人の少年が立ち上がった。

少年の名は一ノ瀬渚^{いちのせなぎさ}

彼は手始めに組織「ナイトメア」を結成し、日本に対して宣戦布告した。

平和だった日本を取り戻す為に……………

プロローグ（後書き）

ここでは人型機動兵器の説明を書きます。

PM-AO1「セルク」

全長4、39m

装備、リニアライフル

機体解説

日本が独自に開発した人型戦闘用機動兵器

開発当初は軍の中でも適正のある極一部のパイロットのみに与えられていたが2008年の現在は一般のパイロットにも支給され始めた。

日本国外ではあまり配備されていない

コックピットが後部に設置されている。これはパイロットの命を考慮しての事である。

ちなみに軍正式採用機カラーはオリーブグリーンで隊長機のみ肩の色が赤

ナイトメア使用機のカラーはブラック

第一話 襲撃（前書き）

これもプロローグ的なものです。

第一話 襲撃

西暦2008年4月某日

一台の大型トレーラーが深夜の道路を滑走していた。

「おいっ！渚」

「なんだ、由井」

渚は紅坂由井こうさか ゆいに肩を掴まれる。

「この戦力だけで大丈夫なのか？」

「問題ない、それより早くセルクに乗れ！」

渚は由井にそう言って軍から強奪した機体に搭乗するように促した。

「全機、作戦を確認する」

渚は堂々とした態度で声を発した。

「まず私の乗るラングがセルク量産工場に突入、それから五分後に突撃隊は突入しセルクを強奪、由井、ロフティ、サリーナ以上三名はトレーラーの護衛、いいか？」

「了解」

渚は全員が頷いた事を確認し次の指示を出した

「応千おうせん、ハッチを開けろ！」

応千と呼ばれた男は渚の指示通りにハッチの開閉スイッチを押した。ブォォオンと音が鳴り、ハッチが開き人型の真紅のロボットが姿を現す。

「ラング、出るぞ」

渚が呟くと同時に「ラング」と呼ばれた機体が加速を開始する。

一直線に真紅の機体が滑走しながら前進する。

「見えた！」

ラングの眼前には工場と警備に当たっている軍の二機のセルク

「お前の力見せてもらおうぞ！」

渚はラングの右腕に装備されているリニアバズーカのトリガーを引

き、連射する

ドゴォーン！

二機のセルクに見事直撃そのまま工場の壁を打ち破る

「こちら渚突入成功」

渚は通信機を取り出して、トレーラーにそう告げた。

「由井だ！トレーラーに異常なし、突撃隊を出すぞ？」

「ああ、頼む」

渚は通信を切り、向かってくるセルクを撃破していく

「將軍、大変です。エリア3の生産工場が何者かによって襲撃されたとの事です。」

慌てて入ってきた士官がそう告げた。

「やはり来たなナイトメア、今すぐにエリア3にカウラを援軍に向かわせろ！」

將軍が士官に指示を出して自らも司令室に向かった。

だがその頃にはナイトメアの突撃隊はセルクに搭乗、作戦の八割を終えていた。

「由井！脱出ルートは？」

「確保できてる」

「よし、由井はトレーラーと奪ったセルクと共に脱出しろ！ロフティとサリーナは私と合流しろ！」

「了解！」

渚はその場で待機、二人が来るのを待った。

そしてメインカメラから上空を見上げた。

「そろそろか・・・」

「リーダー、遅れてすいません」

「急いだのですが敵が多くて」

十分後、ロフティとサリーナが渚の許へ来た。

「いや、丁度いい上を見ろ！」

「上？」

二人は渚に言われた通りに上空を見上げ、絶句した。

「リーダー、あれは」

ロフティの問いに渚は平然と答えた。

「ああ、日本軍が所有する大型輸送機「カウラ」だよ」

まるで判っていたかのように・・・

「リーダー、あれはセルクを20機は搭載しています。それが一度に降下されたら三機で応戦するのは無理です」

サリーナは講義したが渚は余裕の笑みを浮かべた。

「ふふっ、降下されたらな」

二人は動揺したが渚は指示を出した。

「私のラングなら一度に加速すればカウラのブリッジ部まで行ける。だが問題はその後だラングのエンジンが尽きてしまう、そこでロフティとサリーナは私のラングを受け止める！セルクでもできるはずだ。」

「了解」

ロフティは素直に承諾、しばらくした後サリーナも承諾した。

「頼んだぞ」

渚はそう呟いてラングの全出力をブースターに回し、一気に上昇やがてカウラのブリッジ部の目の前にたどり着く

「くっ！テロリストがあ！」

カウラに搭乗していた将校がそう呟いたが当然渚には聞こえないラングはゆっくりとリニアバズーカを構える。

「さようなら」

無情にも銃口から光弾が放たれカウラのブリッジ部が炎上する。

「私の勝ちだ！」

渚の乗ったラングはエンジンが切れ、落下していく

翌日の朝、空で大きな爆発があった事が報道された。

第一話 襲撃（後書き）

今回の機体説明

P L C－A 2「ラング」

全長5 m

日本軍の次世代量産試作機

渚がナイトメア結成前に軍から奪った機体

セルクでは実現できなかったホバー移動が可能になり、機動性はセルクの約4倍

装備 リニアバズーカ、散弾式リニアライフル

機体カラーは鹵獲時はホワイトだったが渚が目立つようにレッドに変更した。

第二話 休息（前書き）

多分しばらく間が空くかも知れません

第二話 休息

東京都、現在は廃墟の街と化している。

廃墟の街となってしまったのは五年前の2003年、軍が本格的に活動を開始した時からだ

今では滞在していた外国人が身を潜めながら暮らしている。ナイトメアのアジトはその東京の地下に存在する

ナイトメアは先日行われた作戦の成功を祝ってパーティが開かれた。

「なあ、渚？」

不満気に由井が渚に話しかける。渚はノートパソコンを片手に対応する

「何だ？」

「ほんとこんなんでいいのか？」

由井が言いたい事はただセルクを強奪しただけでこんな浮かれているのかと言うこと、渚もその事に関しては少し難儀していた。

「ああ、こんな事できるのは今のうちだからな。悪いが自室に戻るぞ？」

渚は由井に断って、ノートパソコンを凝視しながらエレベーターに乗り下ろす階にある自分の部屋に向かう

「こんな時ぐらい休めば良いのにさ」

由井はそう呟いて、パーティの会場に向かった。

「疲れるな」

渚はノートパソコンを閉じ、机にうずくまる

近くにある小型の冷蔵庫から一本のペットボトルを取り出し一気に飲み干す。

頭を抑え、ため息を吐く

「寝るか」

渚は椅子から立ち上がり、ベッドで寝ようとした時だった。

「なっ！」

一人の少女が渚の部屋のベッドで寝ていた。今度は大きくため息を吐いた。

「亜里亜、起きろ」

渚は亜里亜の体を軽く揺する。

「うう、だあれ？」

寝ぼけた口調で亜里亜は目を擦りながら起きた

「ここは俺の部屋だ、なんか用か？」

「あつ、うん、ミリアさんに医療品が足りなくなってきたから頼んできてって言われたの」

「そうか、あそこにリストがあるから欲しい物の欄にチェック入れるように伝えといてくれ」

そう言って、机を指差す。

「うん、わかった。じゃーねー」

亜里亜はリストを取って渚に手を振って部屋を後にした。

「やっと寝れる」

渚は布団の中にもぐり込んだ
ピピッ！ピピッ！

渚の通信機が鳴った。渚は「ああもう」と言いながら通信機を手にとった。

「こちら。渚どうした？」

中から聞こえてきたのは男の声、応千だ

「ファントムから物資が届いた、どうすりゃいい？」

「分かった。そっちに行く由井にも連絡しといてくれ」

「了解」

通信機を置いた渚はジャケットを羽織って、自室にをあとにする

「ファントム」表向きは日本軍軍事会社だが裏では様々なレジスタンスに協力している組織だ

パーティ会場から少し離れた所にある倉庫、実質ここがナイトメア実動部隊の基地になる

多数の兵器に鹵獲したセルクが配備されている。ナイトメアは複数の部署で成り立っている

現在、渚達が居るのは整備士などが日々働く「整備部」だ。

「整備部」の仕事は名前の通り機体や兵器の整備が仕事だが物資の搬入なども「整備部」仕事だ

「セルクが十機に新型の「ガラン参式」あとは小型の輸送機が一隻他は全部武器だ。」

あらかた説明を受けた渚は由井に向かって一冊の本を投げつけた。

「うわっ！」

由井は慌てて受けとめる

「今度からそれがお前の愛機になるから読んどけ！」

渚が渡したのはガラン参式のマニュアル、由井は「サンキュー」と言って姿を消した。

「ほんとに良いのか？ あいつで」

「ああ、ガランは射撃に優れている機体だ。ナイトメアで射撃能力は由井が一番だ。だからパイロットに相応しい」

「そんなもんか、話は変わるけどほんとにやるのか？」

「ああ、なんとしても実行するさ、そうすれば東京は私達の物のなる。整備頼んだぞ」

応千は「任しとけえ」と言っただけで仕事に戻った。

「これで東京は私の物だ！」

そして一週間後、大規模な作戦が開始された。

第二話 休息（後書き）

今回の機体説明

P L B－A 3「ガラン参式」

全長8、5 m（大型リニアキャノン含む）

装備 大型リニアキャノン、リニアライフル

支援組織「ファントム」が「ナイトメア」に渡した機体、装甲が通常のセルクの五倍もあるが機動力が低下している

第三話 空港での攻防（前編）（前書き）

どうですか？面白いでしょうか？

第三話 空港での攻防（前編）

渚は「ナイトメア」と言う力を手に入れた。

この力は日本を変える為の力、武器を持つ者を罰し、武器を持たない者を助けるための力

渚達「ナイトメア」は臨海部へと向かっていた。

これから東京国際空港を制圧するためだ。東京国際空港は唯一東京で軍が滞在している場所、ここを制圧すれば東京に日本軍がいなくなり事実上、東京はナイトメアの物になる。

「各機、三十分後にリーダーから指示が出るそれまで待機せよ！」緊張が包む中、ロフティの声が響く隊員達は気を引き締めていく

渚は今回の作戦を「空港崩し」と名付けた。現在、部隊を展開させている。

お台場で待機している由井はガラン参式に搭乗、渚に連絡を入れた。

「渚聞こえるか？ 由井だ」

「うむ、聞こえるぞ」

通信機の手からは確かに渚の声が聞こえてくる。だが由井は渚の居場所は知らされてない

「俺らは配置に着いた。でもお前の居場所が知らされていないのはなぜだ？」

「ふっ、安心しろ！ 余程の事がない限り私が出る必要はない！」

由井は頭を掻きながら言葉を続けた。

「せめて俺にだけでもいいから教えろ！」

「悪いが応千から連絡が来た。切るぞ」

ガチャ！

由井はガラン参式の通信機を叩き着けた。

「あいつ、ふざけやがって！」

「落ち着いてください、由井さん」

暴走気味の由井をサリーナは静止する。

こうして次々にナイトメアの部隊が配置されていく

「応千！C小隊の配置は？」

「完了したぜ！」

渚はその言葉を聞いて笑みを浮かべた。そして指示をだした・

「ロフティ率いるA小隊は突撃を開始！B小隊は狙撃を開始せよ！」

「了解！」

十機の黒いセルクが一斉に突撃を開始、さらに後方からは大量のミサイルが迫って行く
軍のセルクは迎撃を開始するがほとんどがミサイルの餌食になり次々に撃墜されていく

「しょっ、三条將軍で、敵襲です。」

狼狽した士官が三条に言った。だが三条は微動だにせず、冷静に指示をだした。

「ただちに05，06，07小隊に出動を要請、残りの部隊を全てを迎撃に回せ！」

「りよ、了解」

士官は落ち着きえを取り戻し、三条の指示を軍司令部伝えた。

「さあ、どう出る？ナイトメア」

「リーダー、聞こえますか？」

渚がラングのメインカメラで戦闘を静観しているとロフティから連絡が入った。

「どうした」

渚はインカムを着け、地図を見ながら対応する。

「どうやら敵は体勢を立て直しています。指示を求めます。」

渚はパソコンを開き、作戦プランを確認する。

「ロフティ、部隊の状況を教えろ！」

「二機が大破、三機が中破しましたが戦闘に支障はありません！」

「よし、そのまま後方に下がれ！」

「了解！」

「將軍、敵の部隊が後退していきます。」

司令部では先ほどまで狼狽が見られたが三条が来てから落ち着いていた。

「よし、このまま陣形を維持せよ！私は「ファング」で出る」

三条は羽織っていたマントを投げ捨て、パイロットスーツに着替える。

「さあ、ナイトメア見せてみる！貴様らの力を」

「由井、大型リニアキャノンは？」

由井は通信機を手に取り、耳に当てる。

「ああ、いつでもいいぜ！」

渚はそれを確認すると、戦況データを送った。

「見えるか？」

由井はそのデータや配置を見て「ああ」と頷いた。

「敵は横並びで展開している。それ全部狙撃しろ！」

渚に言われた通りに由井は頷き、標準を合わせていく
そしてトリガーを握る。ゆっくりとトリガーを引く

ドォン

ガン参式が放った一撃は横並びの敵を次々に直撃させていく

「C小隊、降下開始せよ！A小隊も同時に突撃をB5からB10も
突撃開始」

渚はこの時点までは勝利を確信していた。

第三話 空港での攻防（前編）（後書き）

今回は人物編「ナイトメア」

一ノ瀬・渚 15歳 男

二年前に見た「鎮圧」と言う名の虐殺を目撃して以来日本を変える事を決意した。なにかと謎が多い

紅坂・由井 15歳 男

渚と同じく虐殺を目撃し日本が変わってしまった事実感した。渚と共にナイトメアを創立した人物

ロフティ・パノラフ 18歳 男

元EU軍パイロット、という経緯でナイトメアに参加したかは不明だが渚に信頼されている人物

サリーナ・アルト 17歳 女

両親が日本軍に殺され、それを理由にナイトメアに参加。ロフティと同じく渚に信頼されている。

第四話 空港での攻防（後編）（前書き）

タイトルを日本開放から元の日本へ・・・に変更しました。

第四話 空港での攻防（後編）

「三条將軍、よろしいのですか？」

「ああ、東京国際空港は私がなんとしても守る。お前らは早くカウラでこの空域を離脱しろ」

三条は通信を切り、レバーを握る。

「ファング、出る」

倉庫からオレンジの機体が飛び出した。

「リーダー、60パーセントほど制圧できました。」

渚はロフティからその知らせを受けた。

「よし、その調子だ」

渚は再度作戦プランを確認、このまま行けば制圧は確実だった。だが予想外の出来事が起きた。

「し、指令、敵があああつ！」

モニター見ると次々と友軍機がロストされていく

「おいっ、C5どうした？」

渚が通信で呼びかけるも反応がない

「リーダー、敵の新型と思われる機体があ！」

ロフティの一言で渚は狼狽した。

「なんなんだ、これは」

「ナイトメアと言っても主力の部隊はセルク、大したことはない」

四機の黒いセルクが三条の乗るファングを囲む

「死ねえええっ」

四機のセルクは一斉にリニアライフルを放つがファングには通用しない

「ふっ、雑魚が」

そう呟くと同時に四機のセルクがコックピットを打ち抜かれ、崩れ

落ちるように倒れ爆発を起こす。

「一般兵がこの程度と言う事は指揮官が優れているようだな」

「くそっ！どう言う事だ」

渚は拳を強く叩きつける。手が流血し始める。渚はインカムを着け、由井に連絡を取る

「由井！そっちで何か見えないか？」

「ああ、見えるよ。オレンジ色の機体、目で追えるけど機体で反応するのは難しいな。」

由井の一言で1つの答えが導きだせた。

「その新型は私のラングと同じホバー移動が可能な機体のようなのだ。なら私が行く」

「お、おいっ！」

由井の制止を振り切り、一気に加速し戦場へと向かう

「司令官、何処にいる」

三条はファングをのメインカメラで見渡すがいまだに発見できない。その時だ！

複数の光弾が直撃するが効果がない、それを放ったのは渚の乗るラングだ。

「貴様が司令官か？」

三条の問い掛けを無視、距離を保ちながら散弾式リニアライフルを連射する。

「どうやら凶星のようだな、ならここで貴様を倒す。」

三条はファングを上昇させ、渚のラングの頭部を蹴り飛ばす。

「くっ！」

そのままファングが持つリニアガンの光弾がラングの左腕部を吹き飛ばす。そしてそのままラングは仰向けに倒れる。

「思ったほどでもなかったな」

ゆっくりとりニアガンの銃口をラングのコックピットに近づける。

ドオン！

激しい衝撃がフアングのコックピットを襲った。それはラングの右腕に装備されていたリニアバズーカだった。

「三条将軍、あなたは詰めが甘すぎた。」

ラングはそのままフアングを海に蹴り落とした。海で壮大な爆発が起きた。

そして1つの知らせが渚の許へ届いた。

「完全に制圧完了、我々が勝利しました。」

第四話 空港での攻防（後編）（後書き）

今回の機体説明

MF－B「フアング」

全長4、5 m

装備 連射型リニアガン、パワー型リニアガン

日本軍が開発した新型機で二種類のリニアガンを使い分ける。渚のラングと同じホバー移動が可能な機体、機体カラーはオレンジ

第五話 宣戦布告と苦悩（前書き）

今回は亜里亜が主役？ になってると思います。

第五話 宣戦布告と苦悩

空港を制圧した翌日、ナイトメアは空港を新たな基地にするため様々な作業に追われていた。

「渚！ここは格納庫でいいんだな？」

「そうだ、応千」

次々と格納庫に入って行くセルク

「亜里亜、負傷者の数は？」

白衣を着こなした亜里亜は青いリストを見ながら言った。

「パイロットが5人、その他が37人ぐらい」

「何か必要な物はあるか？」

「ううん、大丈夫。渚こそその手、大丈夫？」

渚は手を軽く振って「大丈夫」と答えた。

「おい渚、来てくれ！」

由井の声が響いた。渚を呼ぶ声だ。

「ちょっと待て、今行く」

渚は呼ばれて、由井の方へ歩いていく

「ちょっと待って！」

亜里亜が渚の袖を掴んで引き止める。

「どうした？」

渚は亜里亜の方へ顔を向ける。亜里亜は頬を赤く染めている。

「あっあの、後でお話があるんだけどいいかな？」

「何時？」

「空いた時間でいいよ」

「分かった。全部終わったら呼びに行く」

「う、うん」

亜里亜は笑顔で頷いた。

「どうした、由井」

渚は呼び出した本人に尋ねた。

「ファントムから新型が届いてるんだけどさ、パイロットどうする？」

「要するに人選か」

渚は手を組み、考える仕草する。

「ロフティとサリーナはどうだ？」

「二人？新型は二機届いてるのか？」

由井は渚の問いに「ああ」と頷いて答える。

「決まりだ！その二人で、機体名は？」

「たしか「ベクセル」だった・・・かな」

由井は首を傾げながら答えた。

日本で一番高い山と言えば富士山だ。だが今の富士山は半分が人口物で覆われている。

「閣下、東京がテロリストに占拠されました。」

高貴な服装をした男が告げた、だが閣下と呼ばれた男は鼻で笑っていた。

「たしか東京には三条がいたな、奴はどうした。」

「戦死なさいました。」と高貴な男は即答した。

「テロリストは自由に泳がせておけ、今はEUとの戦いの事を考えろ！」

高貴な服装をした男は「はっ！」と一礼しその場を後にした。

「渚、放送部から連絡が来た。」

「分かった！由井着いて来い」

渚は由井を引き連れて、ある場所へ向かった。

その場所はスタジオのようになっていて、カメラが一台設置されていた。

「これを着ておけ」と渚は由井に黒いスーツを渡し本人も黒いスーツに着替えた。

「何をするんだ？」と言う由井の問い掛けに渚は笑って答えた。

「宣戦布告だよ」

三十分が経過した。

「渚！由井！準備はいいか？」

応千は大声で二人の名を呼び、確認を取る。二人は応千に向かってサインを送り身なりを整えた。

「本番、三秒前、二、一、スタート」

渚は凜とした態度で声を出した。

「日本国国民よ！私はナイトメアの首領、一ノ瀬渚だ！我々は現在東京を占領している。だがこれはテロではない・・・これは今の腐敗した日本を変えるための行い、よって！我々は日本軍に対して宣戦布告を宣言する！」

人々はこの宣戦布告に対して色々な考えを持ち始めた。今の日本は昔と違い権力が物を言う時代だ

今のままがいいのか？それとも昔のように平等なのがいいのか

今の日本は貴族主義のようになってしまっている。この日を境に日本を変えようとするレジスタンスが増えた。

「応千、コーヒーを一杯もらえるか？」

応千は言われた通りに缶コーヒーを渚に投げ渡した。

「馴れないない事はするものじゃないな」

渚は誰にも聞こえないように呟いた。渚はコーヒーを飲み干し、由井に後の事を頼み亜里亜の許へ向かった。

渚は亜里亜の部屋の前で立ち止まり、深呼吸をしてドアをノックする中から「どうぞ」と言う亜里亜の声が聞こえたのでドアを開ける

「もう、いいの？」

亜里亜は渚に訪ねた。

「開口一番がそれか？いいから来たんだ。風呂上りだったのか？」
亜里亜の服装は先程の白衣と違い同じ歳ぐらいの子が着るパジャマだった。

「うん、そうだよ」

亜里亜は笑顔で答えた

「ここはいいか？」

「うん、地下に比べたらすごく快適だよ！地下にいた頃はお風呂に入ってもすぐに汗かいちゃうもん」と渚の問いに即答する。

うれしそうな亜里亜を見て、頑張った甲斐があったなと渚は少し感じていた。

「そういえば、話って何？」

渚は話を切り出すと亜里亜は暗い表情になっていく

「うん、いきなりだけどさ・・・今の日本、好き？」

「嫌いだよ、今の日本は・・・」

渚は頭を抑えて答えた。

「さっきの宣戦布告見たよ。渚が本気だって事も伝わった。日本を変えるって言う目標が・・・でもその上で言わせて」

渚は一度視線を外したが再び亜里亜に視線を戻した。

「もう、戦いなんてやめて、お願い」

渚は言葉を失った。何を言えば分からない色々な言葉が混濁している。亜里亜は言葉を続けた。

「もう人が死ぬの嫌なの、見たくないの戦いも死体も、大丈夫だよ少しつらい思いはするかも知れないけどそのつらさを我慢すれば平和に暮らせるよ」

亜里亜の悲痛な声が渚の心に響いてくる。渚は亜里亜を強引に抱きしめた。

「ごめん、戦いはやめられない。今の日本じゃ平和には暮らせない。俺はみんなに昔みたいにつらさのない日本に戻りたいんだ。だから・・・」

言葉が出なかった。いや出せなかったと言うのが正しい。気づけば

亜里亜は泣いていた。

渚は亜里亜を離して「ごめん」と一言だけ伝えて亜里亜に部屋を後にした。

渚は廊下に力尽きたように座り込む

「戦いをやめて・・・か」

その日、渚は珍しく深い眠りに落ちた。

第五話 宣戦布告と苦悩（後書き）

今回も人物編ナイトメア

亜里亜 15歳

渚と由井とは昔から仲がよかった。渚と由井が戦う事を決意した時少しでも支えになりたいと思って「ナイトメア」の医療部に参加した。

南 応千 30歳

「ナイトメア」整備部の部長でもあり、渚に信用されている。パイロットとしての技能も高い。そのため時々出撃する事がある。

ミリア ?歳

見た目は二十代ぐらい、元米軍の医療部隊の隊長

「ナイトメア」に参加した。理由も不明、だが亜里亜にとってはとてもいい上司

第六話 亜里亜

翌日、渚は廊下で目を覚ました。

昨日の出来事が頭から離れず、ぼおっーとしている。
珍しいと思った由井は渚に話かけた。

「渚？」

「・・・」

「渚？」

「・・・」

由井は埒が明かかないと思って肩を軽く叩いた。

「おいっ！渚、どうした？お前らしくないぞ」

「ああ、ごっごめん」

渚は慌てて身なりを整えた。それを見た由井は呆れたように言った。

「お前、昨日何かあっただろう」

渚の表情が引きつった。由井は強引に渚の手を掴み空港の一回にある食堂へ向かった。

「どうしたんだ？お前らしくないじゃないか」

二人は適当な場所を選んで、椅子に座った。

渚はコーヒーを、由井はサンドウィッチをそれぞれ頼んだ。

「・・・」

由井が話を切り出すとすぐに黙る。

「なんとか言えよ！」

由井は周りを気にせず怒鳴った。周りにいた団員は由井の方へ視線を向けた。

「一人の少女も守れないとだめだよな」

やっこの思いで口を開いた。

「開口一番にそれか？それじゃ何があったか分かんないだろ」

「分かった。話すよ」と言っつ渚は出来事を話した。

「亜里亜ちゃん、どうしたの？仕事だよ」

医療部長のミリアが何度もドアをノックするが反応がない

「どうしたんですか？」

たまたま通りかかったロフティがミリアに尋ねた。

「仕事の時間なのに出てこないのよ」

ロフティはしばらく考えた後、ある事を思いついた。

「リーダーを呼んできます。」

「お願いね」と言ってミリアはロフティを見送った。

「・・・そうか」

頼んでいたサンドウィッチを食べ終わり、渚の話を聞いた由井は深刻な表情をしていた。

「確かに宣戦布告した後になんな事言われたらショックだよな」

渚はさっきから「ああ」としか答えない

「でも亜里亜が言ってる事も一理あるな、本当にこのまま戦いを続けて一國を相手に勝てるかどうか分からないからな」

「ああ」

「そう言えば応千が呼んでたぞ、ラングのことで話したいって」

「分かった、行ってくる」と言って椅子から立ち上がりその場を後にしようとする由井が手を離さない

「はなせよ！」

怒気を込めて言うが由井は首を横に振り行かせようとしな

「今日は生き抜きだ。亜里亜誘って遊びに行こうぜ、どうせ今のお前じゃ的確な指示は出せないからな」

「何でもお見通しって訳か」

渚は苦笑し了承した。

「由井さん、リーダーは？」

食堂で由井を見かけたロフティは尋ねた。

「え？渚なら亜里亜の所に行っただけだけど・・・」

「そうですか。ありがとうございます。」と言って立ち去ろうとした時

「亜里亜がどうしたの？」

「それが部屋から出てこないんです」

「よし！ロフティ行こう」

「はっはい」

由井はロフティと共に亜里亜に部屋へ向かった。

かくして渚、由井、ロフティ、ミリアの四名が亜里亜の部屋の前に集まった。

「ほら、原因を作ったお前が行け！」

由井は強引に押し入れようとするが二人は由井は止める

「由井、強引に渚を行かせちゃだめよ」

「じゃあ、どうすりゃいいんすか？」

由井は髪を掻きむしる。ミリアはポケットから煙草を取り出す。渚はすでに混乱していた。そしてしばらく沈黙が流れる。

沈黙を破ったのはミリアだった。煙草を吹かしながら渚に尋ねた。

「あんた亜里亜の事、好き？」

「「えっ？」」

ちなみに声を上げたのは由井とロフティだ。渚は動揺していた。

「えっとお・・・」

渚は返答に困っていた。さらにミリアは付け足した。

「もちろん部下としてでもなく、友達としてでもなく一人の女性として、亜里亜の事好き？」

渚は意をけて答えた。

「はい」

ミリアは「よし」と頷いて鍵を渡した。

「これって・・・」

「お前だろ？私に女性専用の部屋の合鍵を渡したのは」

「さあ、後は若い者同士で何とかしなさい。ロフティ、由井行くわよ」と言って二人を連れて何処かえ姿を消した。

「あとは俺次第か・・・」

渚は拳を強く握った。傷が開いて包帯が真っ赤に染まっていた。自分の頬を叩いて、鍵を開けた。

カチャ！

「亜里亜？」

部屋の中は真っ暗で廊下の明かりが部屋の三分の一を照らす。ベッドでは亜里亜がうずくまっている。

「来ないで・・・」

か細い声でうまく聞き取れなかった。

「えっ？」

「来ないで！」

今度ははっきり聞こえた。涙声だった。

「みんな心配してる。ミリアさんも由井も、今日は休みを取ったから由井と俺と亜里亜の三人で遊びに行こう、昔みたいに日本が変わる前みたいになさ・・・」

でも亜里亜は首を縦には振らなかった。

「もう、嫌私はもう人が傷つくのは嫌！」

亜里亜も渚と同じ15歳、本来なら同じ年頃の子と遊んだり食事に行ったりするのが当たり前だ。渚はゆっくりと亜里亜に近づいて両肩を抑える。

「約束する。もう誰も傷つけさせない、もう誰も死なせない。だから今日は少し遊んで鬱憤を晴らそうよ」

渚は「三十分後、空港の外で待ってる」そう言い残して渚は亜里亜の部屋を後にした。

「三十分ちょうど」

由井は時計を見ながら呟いた。渚は不安でしょうがなかった。本当に来てくれるのか

渚は真っ赤に染まった包帯を俯いて見つめていた。その時、渚の手を握る一人の少女、青いドレスを着た亜里亜だった。

「ごめんね、渚」

その日の三人は子供のようにはしゃぎまわったと言う。つらい現実を忘れて・・・

第七話 甲府制圧戦

宣戦布告から一週間、各地でテロが活発かされた。

渚は団員から「やりましたね!」と言われるが渚は詰まらなさそうなに「テロでは日本は変えられない」と言っていた。

そして渚は次の作戦を発案した。目標は隣接する県の1つ・・・山梨県

山梨県には最近、新型が配備されたと言う情報が入った。

渚は応千と相談しラングを改良、接近戦装備「プラズマブレード」を装備させた。

これにより「ラング」は「ラングR-2」として生まれ変わった。今回の作戦はこの事を踏まえての作戦だった。

渚も亜里亜と約束して以来、無理をしなくなった。

「各機、再度作戦を確認する。」

渚はラングに搭乗、通信機を取り全機に連絡を入れる。

「まず私が率いるA小隊は雲取山から甲府に一直線に突撃、由井率いるB小隊はカウラを使い上空から甲州街道に降下それを確認したらロフティのC小隊も突撃開始、サリーナのD小隊は私の合図を待て!」

山梨県・甲府、軍司令部

「夜見トオル中尉、どうやらナイトメアが来るようだ。期待してるぞ!」

トオルと呼ばれた男は司令官に敬礼し自分の機体を眺める。

「渚、ほんとに君なのか?」

「これより作戦開始、行くぞ!」

次々に了解と聞こえ、一斉にラングに続き黒いセルクが突撃をさせていく

「さあ、新型を見せて見ろ！日本軍」

「指令、ナイトメアです。」

「ただちに迎撃部隊を出せ！トオル中尉は？」

「バリスタで待機しています。」

「通信をつなげ！」

司令官はインカムを着け、トオルに連絡を入れる。

「トオル中尉、期待しているぞ！」

「了解」

そして「バリスタ」が格納されている格納庫

「無理しないようにね」

女性オペレーターの紗枝がトオルに話しかける。

「大丈夫です。バリスタはどれくらい稼働できますか？」

「長くて一時間くらいよ」

トオルは「分かりました。」と言ってヘルメットを被り、搭乗する

「バリスタ、夜見トオル出ます！」

白い機体が滑走して行った。

「アサルトライフル」

渚は次々と軍のセルクを撃墜していく、そんな最中一機が渚のラング目掛けて接近する。

それはトオルの乗るバリスタだった。

「ふっ！やっと来たか、新型が」

ラングはアサルトライフルを投げ捨て、左腰に装備されているプラズマブレードを引き抜く

「接近戦武器？」

バリスタはアサルトリニアショットガンをラング目掛けて連射する。だがラングは左腕に装備されたディフェンスプレートを前に突き出し全て防ぐ

「新型が聞いて呆れる」

渚が油断した一瞬
ガンッ!

強い衝撃がラングを襲い仰向けに倒れる。バリスタはそのままラングの頭部を地面に叩きつける。

「投降しろ! 僕は武器を持たないものは撃たない」

全チャンネルを通しての通信だったため全機体に聞こえた。

「その声・・・トオルか!」

「そうだよ、渚」

トオルはヘルメットを外して素顔を見せる。

「お前! 死んだんじゃないのか?」

「僕は生きてる、こうして日本軍軍人として」

「ふざけるなあっ!」

渚のラングは右腕を振り、バリスタの左腕をプラズマブレードで切り捨てる。

「何?」

「リーダー!」

ロフティも合流しベクシルで援護射撃を行う

「聞こえる? トオル君」

バリスタに通信が入った。

「はっはい」

「もう撤退して、軍は甲府(こうふ)を放棄するみたい」

「どうして?」

「ほとんど制圧されたの、だから戻って」

「了解!」

バリスタは後部のウイングを展開し飛翔していく

「リーダー」

「追うな、あの左腕を回収が優先だ!」

「了解!」

「こちら由井、制圧完了だ」

渚はその報を聞き、D小隊を警戒に当たらせラングから降りる。

最後に「富士山には手を出すな」と伝えて

「渚、こっちに来て」

無理矢理、亜里亜に医務室に連れて行かれ渚はずうっと考え事をしていた。

（なんでトオルが日本軍なんかに・・・）

そのことがしばらく頭から離れなかった。

第七話 甲府制圧戦（後書き）

今回の機体説明

PLCIA2-2「ラングR-2」

全長5m

破壊された頭部と左腕を改装し、武装もすべて変えた。後部にフライトユニットが装備され空中戦を行えるようになった。

装備 アサルトライフル、ディフェンスプレート、プラズマブレード
BR-S「バリスタ」

日本軍が開発した次世代機。まだ試作段階のためワンオフ機になっている。ラングR-2同様、フライトユニットを装備している。

装備 リニアショットガン、サーベル

第八話 集う者達（前書き）

そろそろクライマックスになるかもです。

第八話 集う者達

甲府を制圧したことにより各レジスタンスがナイトメアに参加、もしくは協力する組織が増えていった。そして渚は次々にレジスタンスを指揮下に置いた。

「聞いたか？キョウサカも俺らに協力するって」

キョウサカはナイトメアの次に大きい組織で主に大阪と京都を中心に活動している。関東がナイトメアなら関西はキョウサカと言われるほどだ。そんな組織が味方になるのだ。ナイトメアにとっては心強い

「なあ、由井キョウサカと言えばファリナだよな？」

渚は由井に問いかけた。

「は？何の事？」

「パイロットの話」

「ああ、そうだな」

「悪いが俺は格納庫に行くぞ。ファントムのお偉いさんが来るらしいから」

渚はエレベーターに乗り、格納庫に向かった。

「応千、戦力はどれくらい集まった？」

「今の所、2500くらいだ」

「そうか・・・3000に増やせるか？」

「やってみる」

「すまない」

渚は応千にそう言うのとヘリポートへ向かった。

30分経過した頃、一台のヘリが着陸した。中から一人の少女が出てきた。

「こんにちわ、武田龍二に代わりに参りました。神崎かぐやです。」

「これはどうも、ご丁寧」

渚は軽く一礼した。まさかファントムのお偉いさんが少女だとは渚も予測していなかった。

「あなたがナイトメアのリーダーですか？お若いですね」

「私の方こそあなたみたいな若い人だとは思いませんでした。ではこちらへ」

渚はそう言って室内へと促した。

「用件とはなんでしょうか？」

かぐやが話を切り出した。渚はコーヒーを一口飲んで口を開いた。

「はい、私がお願いしたい事とは非戦闘員を保護して頂きたい」

「保護ですか？」

「はい、今度の戦いは勝てる確率が低いのです。もしそれで非戦闘員まで殺されたら本当に日本はもとに戻れなくなる。」
かぐやはうーんと考える仕草をする。

「分かりました。アメリカ連邦国と話をつけてみます。」

かぐやは渚にそう言った。渚は一礼しお礼を述べた。

「亜里亜、ちょっといいか」

渚は亜里亜を引き止める。亜里亜は「何？」と反応する。

「亜里亜、移動の準備できたか？」

「うん、でも行かないと行けないの？アメリカに」

「みんなの事を思ってる事なんだ分かってくれ」

渚は亜里亜の肩を軽くはたく、亜里亜は「うん」とだけ頷いて自室に戻った。

渚はまた格納庫に戻り、自分の機体「ラングR-2」を見上げた。

「次で最後だ。富士山を落とせば俺達は勝ってさ、元の日本に戻そう、いや戻す。」

思えば長かった。二年前の虐殺を目撃して、軍からラングを奪取して仲間が集まってあと一歩で全てが終わる。

「おい、渚」

「なんだ、応千」

「頼まれた物が来たぞ！」

「分かった。今行く」

甲府基地の地下にある兵器倉庫

ここにはかなりの兵器が収納されている。その一角

「お前に言われた通り、みんなには秘密で取り寄せた。」

「悪いな、いつも無理な事言って」

「これが整備士の仕事だからな」

「説明を頼む」

「この兵器は「ビーム・ライフル」、軍にも正式採用されてない兵器だ。装弾数は合計10発、セルク三機分を簡単に貫く程の威力だ。ラングでも反動に耐える事ができるか分からない」

渚は頷いて「ビーム・ライフル」に触れた。

「応千、有難う。お前も明日には甲府^{こうふ}を出るだろ？もう今日は休んでくれ」

渚がそう言うのと応千は首を横に振った。

「俺は戦えない、でも支えになる事できるだからやらせてくれ」

「分かった。でも明日までいいいな？」

渚はそう言って上の階に戻る。

時刻は午後七時、明日には最後の戦いが始まる。渚は食堂で窓の外を眺めていた。

「席、いいか？」

不意に隣から声がした。渚は振り向きもせず「どうぞ」と言って促した。由井だった。

「どうした？テンション低めだけど」

「辺りを見てみる、どこにテンションの高い奴がいる」

渚の言う通り、辺りの雰囲気は緊張が包んでいる。明日が最後の戦

いになる事を悟っているのだろう

「あはは、お前の言う通りだ」

そう言うのと頼んでいたオムライスに手をだした。

「明日・・・」

「明日？」

「明日の部隊総数は？」

「60」

「勝率はどれぐらいだと思う？」

「50」

渚は素っ頓狂な表情をした。

「なんだよ」

「いや・・・よく分かったなと思って」

バンッ！

由井はどっから取り出したハリセンで渚を叩いた。

「馬鹿にすんなよ！俺だってそれぐらい把握してる」

「そうか・・・悪かった。」

渚は謝って、頼んだコーヒーを飲んだ。

「お前、いつもコーヒー飲んでるけど大丈夫なのか？」

「コーヒー飲んでなきゃやってられないよ」

渚は由井の問いにそう答える。

「お前、ほんと救われない奴だな」

「ほっとけ」

「まあ、冗談はほっといてお前、やり残した事は無いか？」

由井の素朴な質問、渚にとっては難題だった。

「俺か？俺はいいんだよ。」

渚は表情を崩さずに答えた。本当はやりたい事なんてたくさんある。こんな戦いもやりたくなかった。でも誰かがやらなきゃ・・・。

「亜里亜は？」

「うえ？」

考えごとしていた。いきなりの由井の発言で少し動揺した。亜里亜・

・渚にとってはかけがえのない存在になっていた。

「亜里亜に別れを言ったのか？」

「いや・・・言っていない」

「なんで？」

「迷う」

「迷う？」

「後悔するかも知れない」

「でも好きなんだろう？ 亜里亜の事」

「ああ」

そう言って一枚の手紙を取り出す。

「なんだ、それ」

由井はその手紙を指差す。渚は平然と「手紙」と答える。「それは分かる。」と由井は言葉が続ける。渚は手紙を由井に差し出す。

「これ、渡して置いてくれ」

「自分でやれ」

「頼む」

「ちっ、分かったよ」

由井は手紙を受け取った。渚は「サンキュー」と言って席を立つ。

「何処行く？」

「自室、もう一度作戦プランを確認してくる。」

渚はそのまま食堂から姿を消した。由井は「不器用な奴」そう呟いた。

「作戦開始時刻、午後一時、予想外な事が起きなければ午後10時には作戦が終了。」

渚はパソコンの画面を凝視、なんども作戦を確認した。どう計算しても勝率は50%を超えない、敵の本部に攻撃を仕掛けるのだ、渚にとっては妥当な数字だった。そして渚はベッドに崩れるように倒れ眠りについた。

第八話 集う者達（後書き）

MーBO2「ベクセル」

セルクをフロントムが改良、カスタム化しナイトメアに渡した機体。脚部にローラーを装備する事によって機体の機動性を上昇させた。

ナイトメアには二機の渡され、渚が信頼しているロフティとサリナーがパイロットに選ばれた。

第九話 開戦

ナイトメアは山梨県側の富士山を囲むように部隊を展開させた。時刻は12時半、あと30分で攻撃が始まる。

「投降しろ！日本軍、これ以上の戦闘は無駄だ。ただちに投降せよ！」

三回目の警告、だが日本軍はセルクを展開させていく。徹底抗戦の構えだ。

「こちら由井、部隊の展開は全部終了、いつでも行ける。」

由井の知らせを聞いた渚は呼吸を整え、命令をだした。

「全軍、攻撃を開始せよ！」

その渚の声と共に戦車部隊の砲撃が始まり、ナイトメアのセルクが突撃を開始した。

戦場は人間の想いが交錯する場所。守る為に戦う、守りたいから戦う、手に入れる為に戦う

何百、何千の人間の想いがぶつかりあい、消滅する。戦場とは人間にとっては儚い場所であり人間にとっては喜びを感じる場所である。今までどれくらいの血が流れただろう。どれくらいの想いが消えただろう。

それを人間は数えない、いや数えられない

人間は数えたとしても忘れてしまう。それほど人間は脆いのだ。

そんな事は渚も分かっていた。だから渚は戦う事を選んだ、今まで流れた血を無駄にしない為に・・・

「ロフティは部隊を後退、サリーナはそのまま前進、由井は再度砲撃」

的確に指示を出していく渚、戦力差は日本軍は5000それに対しナイトメアは3000はつきり言って油断は禁物だ。渚の指示次第で勝敗が決する。

「ファリナはサリーナの部隊の支援、マーキもファリナ達と合流しろ！」

「了解」

今の所はナイトメアが優勢だ。

「トオル君、準備はいい？」

富士山のある格納庫、トオルはそこに居た。紗枝は再度確認した。

「はい、ナイトメアは僕が食い止めます。絶対に」

「敵は今、鳴沢付近まで来ています。BR－S「バリスタ」は接近してくる敵機を殲滅してください」

トオルはパイロットスーツを着こなして「バリスタ」に搭乗する。

「渚、君は僕が倒す」

「何か言った？トオル君」

「いえ、バリスタ出ます！」

トオルはバリスタを加速させた。

「由井はの部隊はそのまま前進！ロフティは青木ヶ原に転進、ファリナ達の部隊は山中湖を目指せ！」

「了解」

あと少し、あと少しだ。

その焦りが渚を追い込んだのかも知れない

「渚！聞こえるか？」

「どうした？」

「あの白い奴が来た、どうすりゃいい？」

「分かった、そのまま後退しろ！そいつは私が殺る」

渚は由井の部隊が撤退するのを確認した後、ラングを加速させた。

「渚、決着を着けよう」

トオルの乗る白い機体「バリスタ」、渚の狩る真紅の「ラングR－2」二機の機体が対峙する。

「お前に私が倒せるか？」

ラングはビーム・ライフルを腰に収納、プラズマブレード引き抜く
それと同時にバリスタもサーベルを引き抜く

「行くぞ！渚あ！」

「来い！トオルうう」

ジリジリジリ！

刃と刃がぶつかり、火花を散らしていく、お互いに一步も引かない

「はあ！」

バリスタのサーベルがプラズマブレードを弾き、突き刺す

ガァーン！

ラングはディフェンスプレートで退き、後ろに下がる。

「このお！」

次はラングが一気に加速、バリスタに体当たりをぶつける。すぐさま
体勢を立て直し、後退する。

「まだまだあ！」

バリスタのリニアショットガンを連射する。

ドォン！

ディフェンスプレートが碎ける。

「させるかあ！」

ザンッ！

プラズマブレードでバリスタの右腕を切断する。バリスタは仰向け
に倒れる。

「俺の・・・勝ちだ・・・」

渚はゆっくりと呟いた。そして由井に連絡を繋げる。

「聞こえるか？由井」

「なんだ渚？」

「後の指揮、頼んだぞ」

「おいっ、なぎ・・・」

由井が言い終える前に通信を切り、ビーム・ライフルを取り出し、
渚の乗るラングは単身突撃を開始した。

第十話 死と言う終結

「指揮を任せる」

渚は由井にそう告げた。この事が敗因だった。

はつきり言って由井に指揮能力はない、いや渚以外には指揮を取れる奴なんてナイトメアに存在しない。

「くそっ！何処行っただよ！渚あ！」

由井は叫びながらガラン参式のリニアキャノンを連射した。

「リーダーが指揮を放棄した？馬鹿な」

由井はすぐにナイトメア団員にその事告げた。一瞬にしてロフティ含む団員が不安の空気に包まれた。

「聞いたか？放棄したって話」

「聞いた、聞いた。どうすりゃいいんだ」

ロフティは信じれずにいたがファリナは制止した。

「撤退するのが適切だ！これよりナイトメアは撤退する！」

ファリナは全団員にそれを告げる。団員は了承し、撤退を始める。

「渚、何処だ」

由井はガラン参式で辺り森林を搜索し始めた。だがそれが仇となった。辺り一面は軍が所有するセルク及び戦闘車両で囲まれていた。

由井は汗を拭い、操縦桿を握り直す。

「渚、この戦いが終わったら飯一日分奢って貰うからな！」

由井は深呼吸して呼吸を整える。

「行くぜえええ」

それから五分後に大爆発が起きた。

渚はトオルの乗る「バリスタ」を沈黙させ、富士山内部にある司令部に進入した。

渚はラングから降り、司令官に銃口を向ける。

「提督は何処にいる？ 答えろ！」

司令官は震えながらも答える

「上だ、上の提督の間だ。でも提督もしくわその血縁者しか入れん」
渚はニヤリとして、そのまま司令官を気絶させる。再びラングに搭乗し、上目掛けてビーム・ライフルを連射する。そのままラングを上昇させる。

1つの扉があった。

とてもじゃないがラングじゃ入れない。渚はラングから降りて、扉に手を当てる。

ガァーン！

扉は渚の手の指紋を認識し血縁者と認めた。

渚はゆっくりと前に進む、そして膝をつく

提督の間・提督もしくわその血縁者のみ入れる部屋

「御久しぶりです。父上様」

渚は高台に立つ初老の男にそう挨拶した

「その名で呼ぶな！ 汚れる」

渚は立ち上がり銃を向ける。

「残念です。最後にそんな事言われるなんて」

・
・
・

バンッ！

アメリカ連邦国・首都部

ミリアと亜里亜は応接室で座っていた。

「そろそろ応千達が来るはず何だけど」

「・・・」

「亜里亜ちゃん？」

「・・・」

亜里亜はアメリカ連邦国（こっち）に来てから元気がない、そしてずっと一通の封筒を握っている。それは由井が渡した物

「開けてみれば？」

「・・・うん」

亜里亜は小さく頷いて、封筒を開ける。

「亜里亜へ」

多分これを見てる頃には死んでると思う。ごめん、こんな事に巻き込んで。君の事が好きだ。そしてさようなら

渚より」

亜里亜は溢れてくる涙を止められなかった。

「こんな事が起きるなんてな」

渚は右腕と左足に銃弾を受けていた。これは提督と呼ばれた男やったのではない、その横に立つ少年・・・トオル

「ごめん渚、それでも僕は軍人だから」

銃口を向けるトオル

「次で終わりにしろ！」

「了解」

トオルは「ごめん」と言ってトリガーを引き抜いた。

バンッ！

「くっ！」

渚は横の倒れ込む、ぎりぎりで弾をかわす。幸い銃弾を掠った程度で済んだ。

「次で終わらせろと言った筈だが？」

「申し訳ありません」

トオルは頭を下げる。提督は懷からある物を取り出す。

「何ですか？これは」

「これを奴の目に当てろ！それで全てが終わる。」

「分かりました。」

トオルは高台から降りて、渚に近づく

「やめろ、やめてくれそれだけは！」

まるで子供が嫌な事をされるように叫ぶ、だがトオル渚の髪を掴み上げる。

「そう言っただけでまた奪うのか？俺から何もかも全て、全て、どれぐらい奪えば気が済むんだ。父上」

「悪気は無いんだ。ごめん」

トオルは提督に渡された機械を渚の目に当てた。

「うわああああ」

渚の悲鳴が提督の間に鳴り響いた。

その後、ナイトメアは3000も居た戦力が700にまで減少、散り散りになった。

この戦いは「悪夢の戦役」と呼ばれ、一ノ瀬渚の死によって終結した事になった。

第十話 死と言う終結（後書き）

この次回作を書くかも知れません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1143e/>

元の日本へ・・・

2010年10月10日19時28分発行